

香取遺産

Vol.111

圓生涯学習課

☎(50)1224

来迎寺らいこうじの宝篋印塔ほうきやういんとう
新たに市指定文化財に



相輪

笠

塔身

基礎

▲左から、府馬左衛門尉時持塔・神野角助塔・守庚申塔

宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼經を納める塔で、平安時代に我国に伝わったと言われています。鎌倉時代以降には全国的に広まり、供養塔や墓石などにも使われるようになりました。多くは、基壇（返花座）・基礎・塔身・笠・相輪を積み重ねる形になっています。

今回紹介する宝篋印塔は貝塚区の来迎寺墓所にあり、写真左は高さ244cm、写真中央は高さ249cmです。この2基は、府馬左衛門尉時持の子・勝若が、父・府馬時持と伯父・神野角助の供養塔として造立したと伝えられ、神野角助塔には「為月山禅心居士也／慶長七年（1602）三月」の銘があります。写真右は神野角助塔奥の個人墓地内にあり、高さは132cmで、庚申信仰によって建てられたものです。旧貝塚村の善女10余人が二世安楽のため、3年一座の「守庚申」を執り行い、その成就にあたって天正4年（1576）に造立したことが記さ

れています。守庚申は庚申信仰の古い呼び方で、宝篋印塔による庚申塔は、本例を含めて全国で6例が確認されているのみです。また、女性の庚申信仰であることも注目されます。

これらの3基は、銚子で産出する軟質砂岩を使用し、基壇が省略されること、塔身が大きく縦長であること、笠の軒と隅飾突起が直線的に開くため、笠全体が逆台形になること、相輪が太くて短く、九輪や請花は省略するか線刻で表現することなどが大きな特徴で、全体的にずんぐりした形になっています。加工しやすい反面、脆弱で細かい装飾ができないという石材の特性によるものと考えられます。砂岩で造られたこのような形の宝篋印塔は、東総地域から霞ヶ浦沿岸地域に分布し、戦国時代から江戸時代初期にかけて造立された地域色の強い石塔で、下総型宝篋印塔と呼ばれています。3基は、平成27年7月30日に市文化財に指定されました。